
いつでも微笑みを

イシグロミチノブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつでも微笑みを

【Nコード】

N4032W

【作者名】

イシグロミチノブ

【あらすじ】

VOCALOID二次創作。アルバイターな青年マスターと純粋なカイト。大切な人をなくした日常に生きる、彼らのはなし。軽くですがBL要素あり 過去にサイトで公開していたものを掲載しています。

s c e n e 0 1 - s t a r t

昼間は照りつける日差しが痛いくらいだったのに、気づけば朝晩は冷え込むようになっていた。いつの間にか夏が終わっている。ずいぶんと遠くなった空を見上げながら、俺は腕まくりしていたシャツの袖をなおした。

かんかん、と音を立てて階段を上る。二階の右から三番目、203号室が俺の家。ポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込もうとしてやめる。かわりにドアノブを握ると、半回転させて自分のほうへと引いた。ぎい、と年期のこもった音を立ててドアが開く。

「……カイトー、鍵かけとけつつたろー」

「だってマスターが帰ってきたとき、わざわざ鍵あけるなんて手間じゃないですか」

ドアを開きながら言えば、そう遠くない距離から彼の声が口応えをした。スニーカーを放り出すよう脱いで、狭い我が家へ上がる。くつくつと沸騰する音、かちやりと調理器具の動く音。部屋のすみっこにある、やっぱり狭い台所で、カイトはメシの支度をしていた。振り返って、へにやりと微笑む。

「おかえりなさい、マスター。今日は家庭教師のバイトの日だったんですね」

「おう、ただいま。ちかごろ物騒なんだから、ちゃんと閉めるよ。鍵開けんの手間なんて思ってないから」

「はい」

わかっているのかいないのか、間延びした返事に俺はしょーがねえな、と思う。なにがしょーがねえのか自分でわからないまま。

肩に提げていたバッグを部屋のすみに放り投げると、洗面台へ向かう。手洗いうがいを念入りにして居間へ戻れば、小さいテーブルの上にもシが並んでいた。味噌汁と焼き魚と卵焼きと、漬物。今日は和食だ。

「うち漬物つてあつたっけ？」

壁際の指定席に座りながら、エプロンの紐を解くカイトへ問いかける。俺の記憶が定かならば、我が家の冷蔵庫に漬物なんてなかったはずだ。カイトは俺の向かいの、彼の指定席へ座る。

「大家さんがくれたんです。お出かけ先が漬物のおいしいところだったそうですよ」

「へー。おまえいつの間に大家さんと仲良くなってんの。俺あのおばちゃん元気すぎて苦手なんだけど」

「毎朝挨拶するうちに気づいたら仲良くなってました」

またこのパターンか。我が家のカイトは「気づいたら仲良くなつてました」というパターンが非常に多い。園児から果ては老人まで、年齢性別問わず気づいたら仲良くなつてましただから驚きだ。これもある種の才能だろうか。ポーカロイドに才能なんてあるんだろうか。タダでうまい漬物が食えるんだから文句はないが。白菜漬けをもきゅもきゅと咀嚼しながら、俺は言う。

「おまえ、そのうち誘拐されてそう。そんで誘拐されたことにも気づいてなさそう」

「知らない人に車に乗せられても、どこ行くんですかーなんてにこにこしてそうですよね」

「自分で言うなよ」

「自分でもありそうだなと思って」

「じゃーせめて気をつけてくれよ、おまえがいないと食いつぱぐれる」

「白米と塩の生活でしたもんねえ」

カイトが我が家へやってくる以前、俺の食生活は、外食もしくは白米＋塩というなんとも栄養バランスの偏ったものだった。バイト仲間とバイト終わってからそのままメシ食いに行くか、飲み会でつまみ食いながら酒飲むかでもしなければ、白米と塩で満足してしまふのである。ひとりで食うメシなんて味気なくて、腹にたまればそれでよかったから、気づいたらそうなっていた。

それが今やまっとうな和食を口にできている。これもすべてカイトのおかげだ。カイトさまさまだ。

「思っていないですよねー」

「思っていないですわねー」

カイトは不満げに俺を見たが、構わず焼き魚を食っているうちにあきらめて食事へ戻った。

今度の給料日にはハーゲンダッツを買って帰ろう。カイトのはしやぐ様子を想像しながら啜った味噌汁は、めちやくちやうまかった。

居酒屋でバイトしているせいか、人付き合いは広く浅い。店員に絡んでくる客なんていねーよと思っていたが、これが意外と多い。その場のノリで軽く絡んでくる客もいれば、バイト終わるまで待ってるからなんて、割とマジな目で言ってくる客もいる。これも俺のノリと顔がいいせいだ。俺って罪な男。

「でもさ、ツツくんでバイト終わったら割とさっさと帰っちゃうよね」

「そつだよ、ツツって彼女でもいんの？」

「いねーし。いたらこんなむさ苦しく男だらけの場所でメシ食ってねーし」

バイト仲間数人でファミレスになだれ込み、そのままもりもりとメシを食っている。今日はバイト仲間デーだからカイトのメシはお休み。何が入ってるのかわかんない食品よりカイトの手料理のほうがだんぜんうまい、数億倍うまいんだけど、たまには友達と遊びたいお年頃だ。

「でもさ、怪しいって。ケータイ眺めてにやけるときもあるし」

「そつだよ、やっぱ彼女いんだろ」

「いねーし。いたらこんなインスタントみたいなメシ食ってねーし」

これ冷凍食品だろ、そうつつこみたくなるようなハンバーグにフオークをぶっ刺す。カイトがいたら「行儀悪いですよー」とたしなめられてしまうところだが、あいにくここには俺と同じ行儀悪い奴しかいないので誰も注意しない。

「でもさ、お客さんにもよく声かけられてるし」

「そつだよ、隠すなよ」

「おまえらはさつきからでもさとそつだよばっかじゃねーか」

「いやー面白いかなと思って」

「面白いだろ」

「面白くねーし」

でもさとそうだよの奴らは、席が隣なのをいいことに顔を見合わせるとなあとうなずきあった。俺もできることなら隣の奴に「こいつらうぜえ」と同意を求めたいところだが、食べ物の前になると周囲を忘れる大食漢なのでそれもできそうにない。なんでそんな食うのに痩せてんだこいつ。そっぴやカイトも食う割に痩せてっけど、あれはやっぱボーカロイドだからだろうか。

「あ、今にやけた」

「彼女のこと考えてたんだろ」

「だからいねーって」

「隠すな隠すな」

「もしかしてまだ彼女じゃない段階とか？」

「……まあ彼女ではないな」

男だし。しみじみとうなずけば、向かいの席ふたりはまた顔を見合わせるとにやりと笑った。

「ツヅくんが片想い！ うわー俺マジで応援しちゃうー！」

「わりい、女なんて使い捨てのように遊んでる奴だと思ってた」

「それは否定しねーけど」

「うわー嫌味」

何もしなくても向こうからよってくるので、調子に乗って遊んでいた時期もあった。今はそんなことしていないし、しようとも思わない。大人になった証拠だろうか。なんて、本当はカイトがいるからだ。あいつを家にほったらかしにして女遊びに出かけられるほど、俺はひどくない。

「どんな子なの？ 顔とか性格とか」

「顔はきれいだな。そのへんの女じゃかなわねーよ」

友人二人はおおつと歓声をあげる。おそらくかなりの美女を想像しているだろうが、あいにくと男だ。が、カイトがそのへんの女も目じゃないくらいきれいなのは事実だから黙っておく。ここはあえて盛り上げてやろう。

「料理うまいし性格ちょっと抜けてっけど、いろんな年代のやつと仲良くなれるところはすごいな」

「料理上手の天然で人懐っこいなんてサイコーじゃん！」

天然ではない気がするし、カイトのあれは人懐っこいというより人に好かれやすい、だ。

「どうやって出会ったんだよ」

「買った」

「え、ちょ、それ売春とかじゃねーの」

「っつーか買ってくれって頼まれて」

「頼まれてみてえ！」

「気づいたらそのまま家に居座ってんな」

「押しかけ女房ってやつ？ 料理上手の美女が家に居座るってどこ
のエロゲーだよ！」

「おまえエロゲーとかすんの」

「いやー、あれ、いいよ。俺どっちかつつーとAV派だったんだけどはまってさ」

話がエロい方向へ流れていくのに適当に相槌をうちながら、俺はなるほどなあ、と妙に納得してしまった。これはある意味エロゲーのような展開だ。男同士だから最近よく聞くBLなのか。でも俺力イトとエロいことしたいと思わないしする予定もないんだけど。

俺とカイトの関係を説明するのはひじょうに面倒だ。家族と恋人の間、だろうか。恋人とするような行為は一切しない、だけど友情と呼ぶには、俺たちはあまりにも所帯じみていた。そう、所帯じみてる同居だ。だけど家族と言うには、なんか違う気もする。

カイトに買ってくれと頼まれたのは、かれこれ一年以上も前のことになる。あの日は雨だった。雨で、すがられて、ドラマのワンシーンみたいだと思った。

家庭教師のバイトを終えての帰り道だった。傘を打つ雨音に聴覚はうめつくされて、だから、歌っても誰も気づかないと思った。ちょうど人通りもなかったし、ふんぶん歌いながら家へ歩いていった。スニーカーに雨がしみ込んで気持ち悪いなと思っていた。

雨の中、アパートの前にぼさっと突っ立っている人影に気づいた。ゆっくりとした足取りで近づきながら、こんな土砂降りの中傘も差さないなんてどこのドラマだと思った。女に追い出されたのかもなめんどくせ、関わらないどころ。

「その歌…… x x x x ですよね」

だが俺の考えは、そいつの声によって阻まれた。ばかみたいに青い髪から雨を滴らせながら、奴は口を開いたのだった。通りすがりの歌いながら歩いてる男に対して。俺なら歌って歩いてる奴なんて絶対に声かけない。怪しいから。

「そー…… だけど」

無視すんのもなんだし、俺はわざわざ立ち止まって答えた。だけど、そのまま素通りして家へ帰ろうとも思っていた。

だけどそれは、今度は奴の手によって阻まれた。こともあるうか、奴は濡れた両手で俺の腕をつかんだのだ。傘を持つ腕とポケットに突っ込んでいた腕に、じわりと水滴がしみ込む。うへえ、気持ちわり。この場合の気持ち悪いは、決して腕をつかまれたことにはな

く、水のしみ込む感覚に対してだった。

俺はちよつと驚いていた。腕を掴まれたのももちろん驚いたがそれ以上に、不快感がないことに驚いていた。だってふつう、いきなり見知らぬ奴に腕つかまれたら怖いじゃん。でもなんか怖くなかった。奴が死にそうな目をしていたからかもしれない。

「お願いがあるんです。俺を買ってください。俺をあなたのボーカロイドにしてください」

「うへ」

「俺は中古品だから新品の半額にはなりません、保障はついてないけど壊れたら捨てていいです、ごはん作れるし掃除もします、だからお願いします、俺を買ってください」

そついや実家のかあちゃんが半額って言葉好きだったな。

必死の形相にすがられながら思ったのは、間抜けにもそんなことだった。最近電話してねーな、しようかな。かあちゃん元氣してっかな。なぜかかあちゃんの顔が浮かんで、そして思ったのが、かあちゃんだったらこいつを見捨てたりしねーだろうなってことだった。「腕放してくんない」

「え、あつ……」

奴は慌てて俺の腕を解放した。ひどく傷ついた顔をした。俺がいやだからそう言ったんだと思っただろう。俺は自由になった腕を持ち上げて、傘の中に奴を入れてやる。あー俺すっげー優しい。

「めっちゃくちゃ濡れてるし、とりあえずうち来れば。買う買わないは別にして」

「あ、あつ、ありがとうございます!」

奴は笑った。でも泣いていた。傘の下ではその目に涙がたまっているのがはっきりとわかった。雨の中でも泣いてたんだろっな。

ぶっちゃけ、スニーカーに雨がしみ込んで不快だったからうち来ればって言ったんだけど、カイトは俺が優しいからそう言ってくれたのだと勘違いしているのでそのままにしている。

それからひと悶着があり、落ちつくころにはカイトを買うことが決定していた。半額だしーか。貯金だいぶ減るけど。そんなノリで。

「たーだいまー」

ちゃんと鍵はかけてある。よしよし。

ファミレスでメシを食ったあとそのまま酒も飲んでしまったので、ほろ酔いで帰宅する。時刻は深夜、丑三つ時。もう寝てるだろうな、思いながらふらふらとスニーカーを脱いで荷物を放り出して洗面台へ向かう。帰宅してソツコーうがい手洗いは俺の癖だ。幼いころに叩き込まれ、今ではすっかり習慣と化している。だからなのか、俺はめつたに風邪をひかない。バカだからじゃない。たぶん。

「おかえりなさい……マスター」

薄闇の中がうごめいた、と思ったら、目をこすりながらカイトがおき上がってきた。青い髪がびこびこ跳ねている。我が家のカイトは寝ぐせが面白い。

「あーいいつて寝とけ寝とけー」

「ん……はい……」

ひらひらと手を振ると、カイトは大人しく布団へ戻って行った。狭い我が家には布団がひと組しかない。いつも二人で寝ているせい、寝ぼけていてもカイトは左半分きつちりとスペースを作っていた。あれも、俺のうがい手洗いのようなもんだらうか。

買い取った初日は、朝目が覚めたら布団をすべてカイトに奪われていた。今ではそんなことはなく、きつちり半分残されている。うちに来てからの癖だ。

前のところでは、ひとりで寝ていたのかもしれない。俺はカイトの過去をなにひとつ知らない。なんとなく聞きそびれて、まあいーか、と思っっている。だけどカイトも俺の過去を知らない。聞いてこ

ないし、話すほどのことじゃねーか、と思っている。

シャワーを浴びて髪も完璧に乾いてないまま、布団にもぐりこむ。カイトの体温ですこしあったまっている。シーツからは清潔なおいがした。ああ、家事してもらえらってすげー幸せ。

「おやすみなさい……」

起きてたのか。そう思って隣を見れば、カイトはすやすやと規則正しい寝息を立てていた。寝言なのか。夢の中でも寝てんのかな。

「おやすみ」

小さく囁いて、俺も目を閉ざす。穏やかな暗闇の世界が俺を包んだ。

マスターは何も聞いてこなかった。だから俺も話さなかった。だからかわりに、聞かなかった。

だけどたまに、マスターがケータイを開いてにやけていたり、やたら郵便受けを気にしていたりするとき、思わず聞いてしまいそうになる。何を見てるんですか。何を気にしてるんですか。何を待ってるんですか。あなたをそんな顔にさせるのは、誰なんですか。

ケータイを眺めているときのマスターは本当に幸せそうで、このうえなく優しい顔をしている。俺にも向けてくれない、きつと他の誰にも向けていない、特別な表情だ。郵便受けだって、どうでもいいチラシだったり請求書だったりしたときは、子どものように拗ねた顔をする。それくらい楽しみにしている何かがあるんだろうと思っっている。

それがもし、恋人からのメールを眺めているのだとしたら。もし、恋人からの手紙を待っているのだとしたら。そう考えると、どうしようもなく寂しくなる。俺はマスターを一人占めしたいわけじゃない。好きだけど、できればずっとそばにいたいけど、だから恋人なんていないほうが俺には都合がいいのだけど、マスターに恋人がいたって構わない。笑顔で祝福できる。

ただ、それを教えてもらえないのが、寂しい。マスターの好きな人はどんな人なのか、マスターの口から伝えてもらえないことが寂しかった。

聞いてしまえばいいんだろうけど、言わないってことは聞かれないってことだと思っから、聞けない。俺も正直、過去のことは話したくない。だからマスターに質問できない。

『街頭で調査を行ってみたところ、約40%の人が恋人のケータイを見たことがあるという回答になりました』

つけっぱなしのテレビからそんな声が聞こえてきて、意識が勝手に

にテレビに持っていかれる。マスターは今お風呂だから、ここにはいない。視線をテレビからテーブルの上へと移動させれば、そこにはケータイが無造作に放り出されてある。ところどころ傷が入っていて、ストラップはひとつも付けられていなくて、いつだってマナーモードのケータイ。

あれを手にとって開いてちよつと見るだけで、俺の疑問は晴れる。欲しい答えが得られる。

でも、それだけはしちゃいけない。いくら一緒に暮らしていてもプライベートはある。断わりを入れてから見るのならともかく、無断でプライバシーの塊に手を出すなんて最悪だ。でも見たい。

だめだ。絶対だめだ。思いと裏腹に、手がテーブルの上へのびる。マスターのケータイに指先が触れる。

「あがったー」

「!!!!!!」

一瞬、頭の中が真っ白になった。固まった手。すぐにケータイの隣にあつたりモコンをつかんで、ごまかした。

「あれ、チャンネル変えんの、俺この番組アホっぽくて好きなんだけど」

「じゃあ、いいです……」

すぐごと手を引つ込める。危なかった。やっぱり見なくて正解だった。見たらきつともものすぐ後悔していたらう。マスターはなんていいタイミングでお風呂を上がってきてくれたんだらう。

「あ、牛乳もうねーや。カイトー、明日買っておいで」

「はい」

しよーがねえなーと言いながら水をごくごく飲むマスターを横目に、俺はもう二度とこんな気の迷いは起こすまいと固く誓った。

夜の公園に人影はふたつだけ。俺と彼女だけが、その空間に突っ立っていた。

「ずっと前までは、知らなかったんです」

人工的な色合いの髪が、夜風にゆらりと揺れた。星空を見上げながら、ミクは呟く。細い後姿を眺めながら、俺は迷っていた。二歩前に進んで腕を伸ばせば、今にも崩れそうな後姿を包んでやることができる。それをすべきかどうか、迷っていた。

「歌うのが当たり前で、歌うことがわたしの存在する意味で、大好きなこと、生きがいで……だから、歌えなくなったときのことなんて、考えもしなかった」

ここにいるのが俺じゃなくて彼女のマスターであつたなら、迷わずに抱きしめていたのだろうか。もういないそいつに思いをさせてみれば、真っ先に浮かんだのは子どもみたいな笑顔だった。三人で散歩しているときに浮かべた、あいつの無邪気な笑顔だった。

「こんなにづらいことだなんて、知らなかったんです」

俺が迷っているうちに、ミクは振り返る。彼女は笑った。なんだかちよつと困っているように見えた。

頼りない灯りよりもはるかに白く見える手が、ぴくりと動く。しかしその手はなんの動作をすることもなく、元のようにだらりと下げられた。もしかしたら彼女も迷っているのかもしれない、そんな考えが浮かぶ。

「でも、マスターがいないことのほうが、ずっとつらい……」

俺は、うん、とうなずいた。俺もつらい。たったひとり、20年の人生の中で、たった2年間しか共に過ごさなかった相手だ。なのにあいつがいないことが、どうしようもなくつらい。

抱きしめてやることはできなかった。人間の所有物であるミクを抱きしめて、慰めて、愛をそそぐなんてこと、そのときまだ20歳

になったばかりの俺にできるわけがなかった。一時しのぎでもできなかった。おそらく彼女もそれを察していた。
だから俺たちは、なにもしなかった。

「えー、先生って23歳なんですか？」

「若いだろ」

「見えない。大学生っぽい。単位足りないどうしよーって言うてそう」

「言っただなーそれ。雨ちゃんも大学生になったらきつと言うて」「名前と呼ばないください。わたし先生と違って真面目だから言わないもん」

先生なんていまだに呼ばれ慣れない。俺ぜったい先生ってガラじゃないと思うんだけど。

休憩時間の合間、生徒とコミュニケーションを取るのも仕事のよくなものだった。居酒屋と違って座ってられるのがすごくいい。ただそのぶん頭は使うから、最近カイトにつられてアイスよく食うようになった。疲れたら甘いものって発想、あながちバカにできない。「失礼します」

ノックの後、片手にトレイを載せたカイトが入ってきた。この家の、教えてる子のカイトだ。高校生でボーカロイド所持してるなんてぜいたく者め。

「紅茶とケーキをお持ちしました。よろしければどうぞ」
「ありがとうございます、カイト」

カイトにお礼を告げる少女の横顔は、恋する乙女そのものだ。こんなイケメンが身近にいたらそりや恋もするよな。あれ、でもこの子彼氏いるって言うてなかったっけ。将来、男を手玉に取る女になるんじゃないだろうか。まあ俺には関係ないか。

「そっぴや佐藤さんてカイトのマスターだったっけ。でもなんかこのカイト、すげー品行方正で優等生っぽくない？」

テーブルの上に紅茶とケーキを並べるカイトからは、それこそ執事のような品の良さが感じ取れる。我が家の庶民派カイトとは大違

いだ。性格の設定ひとつでこうも変わるもんなのか。

我が家のカイトは、前の持ち主が庶民派に設定したんだろうか。あれはあれで馴染みやすいから気に入ってるけど、こんなふうにつきちつとしたカイトも面白い。

「ありがとうございます、先生」

「マスターのわたしが品行方正で優等生だからですよ」

「うわー可愛くねー」

「先生に褒めてもらわなくてけっこうです。カイトが褒めてくれればそれでいいの。ね、カイト」

「はい、マスター。マスターはとても可愛らしいですよ」

面白いけど、口説き文句まで覚えたらやだなあ。

佐藤さんちのカイトの話をするつもりはなかった。だけどつつかり口からこぼれ落ちてしまったのは、テレビでボーカロイド特集があつたからだ。俺が気に入ってるアホっぽい番組は毎度おなじみアンケート調査のコナーで、ボーカロイドを取り扱った。ボーカロイドがテレビで扱われるのは珍しいことじゃない。本だつてあるし漫画もアニメも映画もある。人が人を描くのと同じような感覚で、ボーカロイドも取り扱われている。

そんで、そのボーカロイドをテーマとしたアンケートは、ボーカロイドの性格に関するものだった。性格はマスターがある程度設定することができる。

「朗らかなのが人気高いって、これ俺のことですよね」

風呂上がりのアイスを食いながらカイトが言う。その青い目はテ

テレビ画面にくぎ付けだ。俺の視線も手元のアイスからテレビにくぎ付けてみる。棒グラフ一覧表でいちばんのびていたのは、「朗らか」だった。

「まあそうとも言う」

「その次は礼儀正しい……これも俺バツチリですね！」

「あーなんか佐藤さんちのカイトっばい」

「佐藤さんて、家庭教師してる女子高生のことですよね」

「え、なんで知ってるの。カイトって超能力あったっけ」

「マスターが自分で教えてくれたんじゃないですか。へー、佐藤さん、カイトのマスターなんですか」

カイトの口から佐藤さんの名前が出るなんて妙な感覚だった。俺いつ教えたんだっけ。仕事なにしてるのか聞かれたときついでに教えたのかもな。

「執事みたいなカイトだったな」

「名前はセバスチャンですか？」

「本気で聞いているところに俺はびっくりだよ」

「マスターも、そんなカイトがいいんですか？」

「……本気で聞いているところに俺はびっくりだよ」

喋っていたせいか溶け始めているアイスもそのままに、カイトが俺を見る。俺はアイスにくぎ付けていた視線を外し、その目を見る。手の中に残っていたコーンを口の中に押し込むと、やっぱ端っこまでアイス入ってねーな、思いながら右手を動かす。

「いだっ」

「眼つぶし！」

「なんでそこで眼つぶしなんですかー！　そこは真面目な顔で“バカ言つなよ、俺はおまえがいちばんに決まってるだろ”って言うところじゃないですか！」

「俺が真面目な顔したら老若男女問わず惚れちゃうからだめだ」

「否定できないところがムカつく！」

カイトはマスターのアホだとかバカだとか顔以外に取りえがない

とか騒ぎながら、でろでろになったアイスをする。ちなみに顔以外に取りえがないというのは俺にとって褒め言葉になることを、こいつは知らない。

「もういいですよ……どうせ俺は家事と愛らしい笑顔しかいいところのないだめカイトですから……」

「おまえそれめっちゃ自画自賛じゃね？」

「ご近所さんと打ち解けておみやげもらうしか能のないだめカイトですから……」

「聞いてねーししかも褒め続けてるし」

こいつは俗に言うバカイトなんだろうなあ。前の持ち主は庶民派でバカな男が好きだったんだろうか。年上の女かもしれない。可愛い男好きで、肩凝るようなのがきらいな。気が合いそうだ。勝手に前のマスターを想像しながら、俺はもう一度右手を動かす。そっぽ向いてる頭に手を載せる。

「俺、おまえ好きだけど」

「え、ほ、ほんとですか!？」

「バイト仲間に彼女だと勘違いされてるくらいに」

「嬉しいです！でも俺、できるならマスターの彼氏がいいです！」

「あーはいはい」

たった一言で機嫌をなおして、今ではすっかり見えない尻尾を振っている。庶民派でバカなカイト、俺は好きだ。

前のマスターが設定してくれたんです。でもマスターが違うのがいいっていうなら、変更したって構わないんです。

言おうと思った言葉はなぜか胸の奥につつかえたまま、出てこなかった。かわりにバカみたいに拗ねる言葉が出てきて、あれ、どうしたんだろう、と内心で首を傾げた。

マスターはこんな俺を好きだと言ってくれた。俺はやっぱりバカみたいに喜びながら、前のマスターを思い出してしまった。あの人も、俺のこのバカなところを好きだと言ってくれた。美しい女の人だった。

「今日から私がカイトのマスターよ」

きれいな顔立ちに似合わない、少年みたいな笑顔を浮かべた。その笑い方は彼女にとてもよく似合っていた。もっと上品に笑えばきつと男の人にもてるんだろう、いつもそう思ってたけど、結局一度も口にすることはなかった。

マスターはいつでも優しくかった。いつでも明るくて、女の人の一人暮らしなのに家事はちつともできなかった。部屋の中を平気で下着姿でうろつくし、ごはんを食べるときは片膝を立てたりして行儀悪かった。だけど飾らないその姿が、彼女らしくてすてきだと思っていた。

相変わらず片膝を立ててごはんを食べながら、ふとマスターは思いだしたように俺を見た。箸でつかんでいたたまご焼きが、お皿にぼとりと落ちてている。マスターは気づいていない。

「わたしこんなだからカイトも庶民派にしちゃったけど、カイトはもっと違う性格がよかった？」

「俺、マスターが設定してくれた性格なら、なんだっていいです。どんなのだって俺の、俺自身の性格なんです」

「あんたほんとにわたしのこと好きね」

マスターは少年みたいに笑うと、向かいに座っている俺の髪を無遠慮に撫でた。いや、かき回した。おかげでぐちゃぐちゃだ。自慢のキューティクルが死んだらどうしよう。

「うちに来てくれてありがとね、カイト」

お皿に落としたたまご焼きを咀嚼しながらマスターが言う。マスターが購入してくれたからこそ俺はここにいられて、マスターが優しいからこそ俺は嬉しい気持ちでいられるのに、どうしてお礼を言われているんだろう。わからなかったけど、嬉しかった。

「俺を買ってくれてありがとうございます、マスター。でも食べながら話すのは行儀悪いですよ」

「だめだめ、男が細かいこと気にしちゃ！」

「うわっ、米粒飛ばさないでください！」

マスターがゲラゲラ笑う。もつと上品に笑えば引く手数多だろう、思ったけど言わなかった。言わないかわりに、俺もバカみたいに声をあげて笑った。

マスターはビールを飲みながら、テーブルに肘をついてテレビを見ている。風呂上がりには必ずビールを飲んでいる。ビールがない日は買いに行けと言われるくらいだ。美人なのに、おっさんだ。

「わたしね、弟がいるの」

テレビを眺めたまま、マスターが言う。右手に握っていた缶ビールを傾けて、テーブルに置いた。かん、と、空になったときの軽い音が響く。うわ、もう飲んだんだ。これで三本目だ。四本目をねだられてもあげるのはやめておこう。マスターのきれいな丸が丸

々となつてしまつたら耐えられない。

俺は食器を丁寧洗いながら、マスターの弟さんを想像してみる。マスターの弟というくらいだから、きつと顔はいいだろう。笑顔も似ているかもしれない。少年のように、無邪気ではつらつと笑うひと。ビールは飲むんだろうか。食事のマナーはどうだろう。お姉さんがあだから、反対にきちつとした人かもしれない。片膝なんて立てなくて、米粒は飛ばさないような。

「ちよつといま失礼なこと考えたでしょ」

がしゅん。洗いかけのお皿を洗い桶の中に落としてしまう。水を張っていたおかげが割れてない。セーフ。

「まさか、そんな。マスターに似てすてきなひとだろうなと思つてました」

「動揺したあとでしれつとうそをつくなんて……そんな子に育てた覚えはないよ」

「俺も、マスターに育てられた覚えがありません」
「嫌味でなく真面目に言つてるところがすごいよ。……いやそれは置いていてさ」

マスターを振り返れば、置いていたの動作をしていた。必ずしも俺が見ているというわけではないのに。

「その弟がさー、ボーカロイドほしいつて言つてるのよ。まだ大学生なのに。どう思う?」

「俺たちボーカロイドとしては嬉しいですけど」

「そうだろうけどそうじゃなくてさ、大学生なのにあんな金のかかるもんほしがるなんて、ぜいたくよね」

あんな金のかかるもんとはまさに俺のことだ。確かに俺たちボーカロイドはものすごくお金がかかる。それを本人の目の前で言ってしまうところがマスターらしい。

「お姉ちゃんそんな子に育てた覚えはないわ!つて言つといた」

「マスターが育てたんですか?」

「まっさかあ。小さいころ“お姉ちゃんお姉ちゃん”つて後ついて

くるから、うつとーしいわってビンタした覚えならある」

ゲラゲラ笑いながら言ってるけど、それは弟さんの幼心を深く傷つけたんじゃないだろうか。もっともこのマスターなので、「ごめんごめん」と軽く謝るだけで済ませていそうだ。弟さん、けっこうタフなひとじゃないかなあ。

「……でも、もうすぐ成人するし、お祝いにあげてもいいかなって思ってるのよね」

マスターの声のトーンが変化する。明るさよりも穏やかさが勝った声。ときどきしか聞けないその声が、俺はとても好きだったりする。

「優しいお姉さんですね」

「でしょー。ま、さすがにわたしひとりじゃ無理だから、父さん母さんと三人でお金出し合って」

「弟さん、きつと喜びますよ」

マスターはそうよねとうなずいた。喜ぶに決まってる、何度もうなずいた。すごく仲良しの姉弟なんだろうな、と思った。

郵便受けを確認して、どうでもいいチラシしか入ってないことに複雑な心境になる。安堵するべきか落胆するべきか、俺にはわからない。3年が経過したいまでも、俺は俺の感情がわからない。

「……マスター」

「おおカイト。ここで出くわすのってかなり珍しいな」

ボロアパートの一階、郵便受けがひとまとめにしてあるその場所で、カイトと出くわした。彼の手には近所のスーパーのロゴが印刷されたビニール袋。買い物に行っていたのだらう。俺は日雇いのバイトを終えて帰って来たところだ。もう少しゆっくり歩けば、帰りの道の中で出会えていたのかもしれない。

「マスター」

「狭い我が家に帰ってメシ食おうぜー。ハラ減った」

「あの、マスター」

「今日は早く帰ってきたし、皮むきぐらいなら手伝ってやらんこともない」

ただあいにくと俺は包丁がうまく扱えない。そのうえ我が家にはピーラーがない。ものすごくいびつな、ある種の芸術性を秘めた野菜になること確実だ。それはそれでいいかもしれない。

「マスターってば」

「ん？ なに、皮むきじゃないって？」

塗装のはげかけた階段の途中で、カイトを振り返る。見上げてくる青い目は、想像していたよりずっと真剣だった。これは間違いなく皮むきの話じゃない。

「マスターは、誰かの手紙を待ってるんですか？」

「そうだよ」

うなずくと、カイトは開きかけの口そのままに固まった。あ、たぶんこいつ、俺がすんなり答えると思っただけでなかつたんだらうな。な

んでかわかんないけど。じゃなきや、こんなアホ面は外では晒さない。外では。

「ぶふっ」

「え、あつ、笑わないでくださいよ。俺、真面目に聞いたんですから」

「ごめんごめん、アホ面が面白くてつい」

笑いながら階段をのぼりきる。カイトも後に続いているようで、足音が響いた。俺はポケットから鍵を取り出しながら、ああでも、とつぶやいた。

「手紙なんてこないほうがいいんだけどな。辛いことがあつたら救援要請しろ、俺が助けてやるって男前なセリフ言ってるから」

がちやり。鍵を開けて、俺はカイトに笑いかけた。カイトは困っているような笑いかけているような、変な顔をして「そうなんですか」とうなずいた。

結局、皮むきは手伝う間もなくカイトが済ませてしまった。とうかいつにも増して調理するスピードが速い。なんだ。俺の知らないうちにレベルアップしてたのか。うまいメシを食べるならありがたい限りだけど。

なに作ってんのかなーと思いながら、カイトの背後からその手元をのぞきこむ。じゃがいも、たまねぎ、にんじん。野菜は皮むきどころか切るところまで終わってた。それを順番に鍋に放り込むと、炒めていく。眺めているうちに肉じゃがらしきものが出来上がっていた。

「うまそー」

「うわあ!？」

カイトの肩がびくりと震えた。

「び、びっくりした!。もう、いるならいるって言ってください!」

「言うもなにも俺ぜんぜん気配消してないし。ていうか気づいてなかった?」

「まったくもってこれっぽっちも気づいてませんでした」

俺の存在を完全に完璧に自然に無視していたということが。俺そんなに影薄いのか。地味にシヨックだ。

「ポーっとしてた……って割にはちゃんとメシ作ってるもんな。おまえすげーな」

「料理なら考え事しててもおいしく作れますよ」

ふふんとカイトが鼻を鳴らす。本当にそのとおりなのだから感服するしかない。

「ハラ減ったー」

「はいはい、もう少しでできますから、ちょっと待っててくださいね」

「おまえさ、悩みがあるなら俺に言えよ」

「はい？」

「あれ、なんか悩みがあるんじゃないかねえの？」

「うーん……あるような、ないような」

「なんだよハッキリしねーな」

「……じゃあ、俺が何言っても、俺のこときらいにならないでくださいね」

「え、なんでそうなの、俺がおまえきらっちゃうようなことなわけ」

安物のアイスは食いあきたとか言われちゃうんだろうか。そればかりは不可抗力だ。貧乏フリーターな俺にハーゲンダッツを買ってやれるほどの甲斐性はない。それとも、家事することに疲れまじったか言うつもりだろうか。あ、むしろ最近あんまり歌わせてなかったからか。

「誰の」

「誰の？（あれ、歌のことじゃねえの）」

「手紙、待ってるんですか」

鍋の中の肉じゃがに視線を落とすまま、カイトがぼつりと問いかけてきた。なんだそのことか。拍子抜けだ。

「あーびっくりした。歌も歌えないなんて実家に帰ります！とか言われんのかと思った」

「えっ、もし俺がそう言ったらマスター、引きとめてくれるんですか」

「そりゃもちろん。俺を見捨てるなカイト！って泣きながらすがりつく」

「なんだかちょっと嬉しいです……って話ずれてるじゃないですか！」

ぱつと明るくなったり頬を染めたり怒ったりと忙しいやつだ。と言いつつ俺もちょっと悪ノリしすぎたな。

「ごめんごめん。手紙は、彼女とかじゃねえよ。紛らわしいけど」

「じゃあ誰なんですか？……マスターが言いたくないなら、いい

ですけど」

「初音ミク」

ミクのことを誰かに話したことはなかった。そして彼女の過去のマスターと、現在のマスターについても。俺がこいつに話すことを彼女はいやがるだろうか。想像してみる。今のミクなら、きっと、笑っていいよと言ってくれるだろう。たぶん。

「マスター……」

「あ、待って待て、おまえ、実は俺がミクのマスターだとか思ってないだろうな」

「違うんですか？」

「俺はあいつにマスターを紹介したんだ。あいつの最初のマスター、死んだから」

カイトが固まった。じつと俺を見ている。俺はどこから話せばいいのか考えて、考えて、悩んで、出てきたのは簡潔な言葉だった。

「ミクの引き取り手がいなかったから、知り合いに頼んで、あいつ引き取ってもらったんだ。普段はメールで連絡取り合ってた、辛いときは手紙って区別してるだけ」

特に意味があったわけじゃなく、じゃあこうしよう、そんな安い提案でそう決まったただけだった。それをミクは律義に守り、俺もなんとなく守っている。ときおり送られてくる、何気ない日常を記したメールだけが、俺とあいつを繋いでいる。

これでよかったと、今なら思う。あのとき無理して俺がミクを引き取っても、お互い辛くなるだけだった。そんな気がする。

「今度は俺が聞いていい？」

沈黙してしまったカイトに尋ねれば、カイトは一呼吸おいて「はい」と返事をしてくれた。カイトは何を考えているんだろう。真面目な顔してるこいつって、頭の中が読めない。

「おまえ、なんで雨の日にずぶぬれでアパートの前にいたの」

「……記憶を消去されなくなかったんです。俺も、そのミクと同じで、マスターを亡くしたから」

ミクを引き取った知り合いこと大学時代の先輩は、ボーカロイド製作会社の一人息子だ。必然的にボーカロイドには詳しく、そのつながりで俺もボーカロイドのことは少し知っていた。

マスターを失ったボーカロイドは、製作会社なりショップなりに引き取られ、初期化される。培ってきた人格も、マスターと作った思い出も、覚えたものごとすべて失うことになる。そうでなければ販売できない決まりとなっている。が、もちろん例外もあった。

「だからマスターが、嘘をついてくれて、本当に助かったんです」正式にカイトを購入することに決め、手続きをしにショップへ向かったあの日。どうしても初期化されたくない、そう言っていたカイトのために、俺は店員に「こいつの前のマスターと友達で、俺とこのカイト知り合いだから、初期化しなくていいです」と告げた。例外とは、こういったケースのことを示す。

カイトは少しだけ涙をこぼしたが、袖でぬぐうと俺を見て笑った。へにやりとした、いつもの気の抜けるような笑顔だった。

「ごはん、食べましょうか」

共に成人式を迎えたその一週間後、シンという名の友人は、初音ミクのマスターになっていた。

「はじめまして、V O C A L O I D 0 2 初音ミクです」

「うわーすげーホンモノ！ 動いてる！ しゃべってる！」

「当たり前だろ、ボーカロイドだぜ」

「なにこれどーしたのなんで持つてんの！？ こないだまで持つてなかつたじゃん！」

シンに呼ばれて奴の家まで向かえば、ソファーに初音ミクがちょこんと腰かけていた。人懐っこい笑顔を俺に向けてくる。俺は突っ立ったまますげーを繰り返して、とにかく自慢したかったらしいシンは無駄に偉そうだった。

「もしかしてシン、女に貢がせたの!？」

「ツツじゃねーんだから」

「あーそりゃそうだよなー」

「納得してんなよ。こないだ成人したろ、だからさ、両親と姉が、お祝いにつて」

途切れがちな口調は気恥ずかしさのためか。しかしこんな高価なものをポンとお祝いにだなんて、こいつんち金持ちだったのか。くそーこないだファミレスでおごつてやんなきゃよかった。

「お祝いに初音ミク！ いいなーめちやくちやいい家族じゃん！」

おまえちゃんとお礼言ったのかよ」

「言ったよ。俺はおまえと違って正直なんだよ」

「俺だつてそれなりに正直だし」

「歌だつて歌えるんだぜ。な、ミク」

「はい。マスターが歌い方を教えてくださったので、歌えるようになりましした」

にこにここと微笑みあうシンとミク。よかったな、と思いつつ、ち

よつと疎外感。ボーカロイドなんて興味なかったけど、こうして見ると欲しくなるもんなんだな。つっても俺はこんな、人間に近い存在、とてもじゃないけど買ったりできない。金銭面ではもちろん、気持ち的にも。

「じゃー歌って！俺、ミクの歌聴きたい」

「そんじゃあ俺はギター弾くかな」

「あの、でも、ここでは苦情の元になります」

浮かれ気分の野郎二人に、ミクが申し訳なさそうに忠告してくれる。俺たちは顔を見合わせ、それならと近くの公園に繰り出した。

シンはこの公園でよくギターを弾いていて、それがきっかけで俺たちは仲良くなったのだ。俺には音楽センス皆無だからよくわからないけど、シンのギターを弾く姿は男の俺から見てもかっこよかつたし、なんとなく離れがたくなるような音をしていた。それは今でも変わらない。

「外で歌ったりして、迷惑にならないでしょうか」

「今ミクって大人気だし、そこまででっかい声じゃなきゃ大丈夫だつて」

「そうそう。俺の作った歌をミクの声で歌うんだ、迷惑なわけない」

「すげー自信だなおい」

「はい！わたし、がんばりますっ」

ギター一本の飾り気のないサウンドに、ミクの声が絡まっていくのを、俺はシンの隣で聴いていた。シンはベンチに座ってギターを奏で、ミクはその正面に立って胸に手を当てて歌っている。俺は二人を眺めながら、その歌に耳を傾ける。

思っていたよりずっと静かな歌だった。可愛い声とは裏腹にどこか寂しさのある歌詞だった。でもその寂しさが嬉しくなるような、たとえば誰かに自分の持つ孤独を理解して受け入れてもらえたような、そんな気持ちになる歌だった。

それはもしかしたら、作ったのがシンだったからこそその感覚だったのかもしれない。これがシンじゃなくて別の、知らない奴が作っ

た歌だったなら、俺はそんな気持ちにならなかつたかもしれぬ。

気づけばベンチのまわりにちらほらと人の姿が集まりだしていた。遊んでいた子どもたち、学校帰りの学生、散歩途中の老人、スーツをびしっと着たお兄さん。そこまで大勢ってほどでもない、だけど確かに歌に惹かれた人たちが、シンのギターとミクの声を聴いていた。

歌が終わってしばらくと拍手が鳴るころに、ミクはようやく聴衆の存在に気づいたようだった。あたりを見回すと、白い頬をぼっと赤くして、深々と頭を下げる。シンは目を細めて彼女の姿を見ていた。俺も拍手をしながら、なんだかいいな、と思った。

それから時間があるときには、三人で公園へ向かうようになっていた。シンがギターを弾いて、ミクが歌って、俺は拍手をする。聴衆は減らなかつた。でも増えもしなかつた。それでも二人は周囲なんて存在しないかのように演奏して、歌っていた。その空気がとても好きだった。

その日常に変化はなかつた。だけどそれが俺にとっては幸せで、居心地がよかつた。きっとシンもミクも、同じ気持ちだったと思う。半年が過ぎたころ。俺がシンと知り合って2年が経ち、ミクがシンと暮らしはじめて半年が経ったその日、シンは交通事故で死んだ。姉の運転する車に乗っていて、ブレーキとアクセルを踏み間違えた大型トラックに衝突されて、死んだ。二人とも即死だったそうだ。

皮肉にもそれが、日常に訪れた最初の変化だった。

目の前が真っ白になるって、きつとあんな感覚だ。マスターの死を知ったときの、俺の感覚。白い空間が見えた。そしてその中に俺の意識があつて、なのになにも、ほんとうに、なにひとつだって考えられなかった。

マスターはその日、携帯電話を忘れて出かけて行った。隣の県で暮らす弟さんとドライブに行くのだと、鼻歌交じりに出かけて行った。慌てて追いかけたけど、マスターの車は駐車場を出たあとだった。まったく、こんな日まで忘れ物だなんて、相変わらずちよつと抜けるマスターだ。だけど嬉しそうに「森と出かけてくる！ デートよデート！」とはしゃいでいた姿を思い出すと、俺まで浮足立つようだった。でもほんのちよつとだけ、妬ける。ちなみに森と書いてシンと読むのが、弟さんの名前だ。

携帯電話が鳴り出したのは深夜になつてからだった。ディスプレイには実家と表示されていた。実家からの電話。お父さんかお母さんだろうか。勝手に出るのも気が引けて、ロックを鳴らす携帯電話を眺めていたけれど、10分も鳴り続けているのでやむを得ず電話に出た。マスターごめんなさい。だけど10分も鳴らし続けるなんてよほど大事な用があると思うから、弟さんと出かけてますよって教えてあげてもいいですよね。言い訳しながら出た電話は、マスターではなく俺宛てのものだった。

静かな男の人の声だった。マスターの父親であることを告げ、マスターが交通事故に遭い亡くなったことを教えてくれた。「もしかたしに何かあつたとき、カイトのことをお願い」マスターは俺を購入したばかりのころ、そう言っていたらしい。「もし死んじゃつたりしたら、お父さんたちは扱えないだろうからシヨップに引き取ってもらつて。書類はまとめて置いてくから」娘はそう言っていた、その言葉に従つて室内を見回せば、マスターが普段読んでいた雑誌

の下に、大きな封筒が目に入った。雑誌をどけてその中身を確認する。ボーカロイド購入、所持に関する書類。これだ。

「あの子は、本当はできることなら、知り合いにでも引き取ってもらうのが君にとってもいいだろうと言っていた。できることなら、私たちだって、あの子が可愛がっていた君を引き取ってあげたい」

マスターのお父さんが俺にそう言ってくれたのは、お葬式が済んで、俺がひとりでお墓参りに彼女の実家を訪れたときだった。ショップに返品手続きをする前にお墓参りをするのを、彼らは許してくれた。

マスターの両親は優しかった。お母さんは泣き崩れてしまっていたけれど、お父さんは俺にいろいろと声をかけてくれた。マスターの所有物でしかない俺にお線香をあげることを許してくれて、先ほどのものも含めて、俺を気遣う言葉をたくさん言ってくれた。だけど君を引き取ることはできない、申し訳ない、と、頭を下げてさえくれた。その気持ちが嬉しかった。

マスターが大切にしていた俺を手元に置くのは、彼らには辛いだろう。身を削るような、心を壊されるような悲しみのさなかに、娘の遺品を。それも、彼女との特別な思い出を持つ俺を目にするのは、それだけでも辛いものがあつただろう。現に、お父さんはお母さんのように泣きはしないものの、今にも泣き出しそうな、あるいは怒鳴り出しそうな、複雑な表情をしていた。

もし俺が彼らの家族だったら、この悲しみを分かち合い、そばにいたことができたんだろうか。俺と彼らが一緒にいるにはあまりにも痛みがひどかった。もし俺がボーカロイドじゃなかったら。いつそマスターの弟であれば、この、回路すべてを溶かし尽くすような悲しみを、分かち合って少しは楽になれたんだろうか。ありもしないことだった。わかっているでも考えずにいられなかった。

それから彼らは返品手続きをしてくれた。ショップに引き取られた俺は初期化されるのをいやがって逃げ出し、無事新しいマスターを手に入れた。前のマスターとの思い出はすべて記憶に残っている。

昨日のように思いだせるくらい、鮮やかに。

今のマスターは優しい。俺の恩人だ。大切な人だ。前のマスターと同じくらい大好きだ。

だけど、そんな大好きな人といっても、悲しみは消えないまま胸の奥に居座っている。きつとどんな楽しい思いをしても、どんなに幸せな気持ちになれても、このからっぽで苦しい感覚は消えないだろう。

それでもいいと、今は思っている。だって大好きなマスターと、毎日を笑いあうことができているから。

俺たちは簡潔に過去を語っただけで、それ以上の詳細は互いに話さなかった。カイトはどうか知らないけど、俺は、必要ないと思っただからだ。誰かに語ることで喪失感が癒えるのなら語ればいいけれど、俺の持つ悲しみもカイトの持つ悲しみも、どんなに詳細を語ったとしても癒えないだろうから。

ただひとつ変わったことと言えば、少しだけ突っ込んだ話をするようになっただくらいだ。

「俺、推測してみたんだけど」

メシを食う手を止めて、温めていた憶測を口にする。

「なにをですか？」

カイトは焼き魚の骨と身をきれいにわけながら、なおかつ目線は俺に向ける。見ないで魚きれいに食べるなんてすげーな。でも話が脱線するので口には出さない。

「おまえの最初のマスター、美人だけど家事できなくて飾らないかんじの女だろ」

「なんでわかつたんですか!？」

「俺は平成のホームズと呼ばれた男だぜ」

「パクリ丸出しですよ誰が呼んだんですか？」

「おまえはいつつもそうやって真剣に聞いてくるから困るよ」

そこはつつこむところだろー、と言ってみてもカイトは「はあ」といまいち要領の得ない返事をするだけだ。まあそれは置いて

「だっておまえ家事完璧だし、庶民派だから」

「でもどうして美人だっただけですか？」

純粹に疑問に思っているのか、カイトはきよんとんとしている。俺はバツ力だなあ、とわざとらしく肩をすくめてみせた。

「そんなもん、男の希望に決まってるだろ」

「美人だといいんですか？」

「当然。好みなんて人それぞれだろうけど、俺は断然美人がいい。美人な年上のお姉さんってサイコー」

遊んでもらいてー！俺のバカみたいにはしゃいだ声に、カイトは箸を動かしていた手を止めた。かと思うと、やけに神妙な顔つきで居住まいを直す。もしかしてはしたないとか、女遊びはほどほどにとか、説教されるんだろうか。うえーやだな。メシ食い終わってか
らにしてほしい。

「俺はお姉さんにはなれないけど、容姿はきれいに作られてるんです」

「（あれ、説教じゃないのか？）ボーカロイドってみんなきれいな顔してるもんな」

「もしかしたら美人の部類には入らないかもしれないけど、マスターが望むのであればパーツを取り換えたって構いません」

「なんでそんな話になってんの。俺おまえのこと顔も含めて好きなんだって。心配すんなよ」

俺が美人なお姉さんに熱をあげていたせいか、捨てられるとも思っただらう。んなアホな。俺がカイトを捨てるなんてありえない。他のボーカロイドをカイトみたいに購入したいなんて思わないし、毎日うまいメシ食えて歌も聴かせてもらえて楽しい会話ができて、なにより居心地がいいのに、手放すわけがない。

「俺が今まで遊んだどんな女より、おまえのほうがいいよ」

そりゃーカイトみたいに料理上手だったり安らぎを与えてくれる子もいたけど、結局はだめになった。なんでだらうな。たぶん俺、遊び相手にしか思われないタイプなんだろうな。楽しければ別にーけどちょっと寂しい。そんなときにカイトと出会ったのは、ものすごくタイピングがよかった。

からん、ころころ、かつん。カイトがぼかんと口を開いたまま、手の中の箸を床の上に落としていた。あーなにやっつてんだこいつ。すげーアホ面さらしてるし。

「マスター……」

「なにやってんだよ、箸くらいちゃんと持つとけよ」

俺は箸を拾い上げると、どっこいせーと立ち上がり、シンクへ向かう。ざっと水で洗うと、そう大して遠くないテーブルに戻る。

「ん」

「え、あ、ありがとうございます！」

座りながら差し出した箸を、慌てて受け取るカイト。そのとき指先が触れて、みるみるうちにカイトの顔が真っ赤に染まった。おお、ゆでダコ。

いやゆでダコじゃなくて、なんだその反応。今までさんざん手ぐらい触れてきたし、ふざけて抱きついたり絞めあげたり、風呂から素っ裸で出てきたことだってある。それどころか布団がひと組しかない我が家では毎晩肩を寄せ合って寝ているのだ。いまさらカイトが照れる理由がわからない。

「おまえ、大丈夫？」

「だ……だ、だいじょうぶ、です」

「具合悪いなら言えよなー、ちゃんとメンテナンスするし」

「はっ、はい」

「あ、そうだ、今度いつしよに墓参り行くか。俺の死んだ友達で元ミクのマスターのなんだけど」

「俺がご一緒してもいいんですか？」

ようやく元に戻ったカイトが、遠慮がちに問う。でもその顔にはどこか抑えきれない喜色がにじんでいた。正直なやつ。俺はちょっとだけ、笑う。

「いいよ。シンも喜ぶって」

「ん？ シン……さん？」

「なんだよ、シンがどうした」

「あの、シンさんって、もしかしてこういう字を書きませんか」

散歩だからギターはない。数歩前を歩くミクが歌う鼻歌は、夕暮れの街中に優しい色合いを持たせていた。それを聴きながら、俺と森は肩を並べて歩く。

「しっかし、弟が森で姉が樹なんて、すげー植物的な名前だな」

「俺だつてもっと、新しいのシンとか進むのシンとかがよかったよ。姉貴だつてどうせイツキってんならひらがながいいって言ってたし」

「けどいい名前じゃん」

「だろ」

「なんだよ文句言いながら気に入ってんじゃねーか」

肩をどつけば森はまあなと笑った。俺たちの笑い声に、ミクが振り返る。不思議そうに首を傾げたけれど、笑顔を向ければすぐに彼女も笑った。ミクが笑うだけでその場が華やいで、俺たちはとても優しい気持ちになれる。

「わたしも混ぜてー！」

ミクは俺たちの間に飛び込んでくると、俺の左腕に、森の右腕にその細い腕をからめた。

「両手に花だな、ミク」

「男二人を花と呼んじゃまずいだろ」

「ああ、花はミクだもんな」

「じゃあ俺らは片手に花かー」

片手の花は、俺らの言葉の意味を理解してかどうかはわからないが、「ふふふ」とささやかな笑い声をこぼした。

歌うような笑い声だと、思った。

s c e n e 1 4 - e n d (後書き)

今まで書いた二次創作すべてひっくるめて、そのなかでいちばん、
気に入ってる話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4032w/>

いつでも微笑みを

2011年9月4日03時24分発行